

「なんくるないさ〜」とはいかない 沖縄離島の高齢者福祉

かがや まり
加賀谷 真梨
民博 機関研究員



いつまでも高齢者が島で楽しく暮らせるよう福祉活動が始められた

今日は「神司(つかさ)」として祭祀(さいし)に従事する
デイサービスの女性スタッフ(左)



真剣に稽古中の三線(さんしん)サークルの面々



沖縄の離島イメージ
二〇〇一年に放映され沖縄ブームを巻き起こしたNHK朝の連続ドラマ「ちゅらさん」。自然豊かな沖縄の離島に生まれた主人公恵里は、その自然に培われた明朗さとバイタリティを活かして東京で看護師となり、その後島に戻って訪問看護師として島民に尽くす。そんな彼女を常に支えてきたのが、元気なオバアをはじめとする仲良し家族であり、島に生まれ育った人は皆家族のみならず親密で人情味に溢れている。だからこそ、帰郷し恩返しをしたくなる島。沖縄の離島は、そうした相互扶助の精神が生まれる場として描かれてきた。

結んで支えるやさしいまちづくり

「ちゅらさん」で表象された互助社会像は、とりわけ高齢者福祉政策において積極的に援用されている。わたしの調査地を含む複数の離島から成る町では、「地域に暮らす高齢者を『結』で支えるやさしいまちづくり」を高齢者の口が恐ろしいから」と、述べた。ヘルパーに守秘義務があることを知っていても、周囲にどのような評判を立てられるかわからないという不安感から利用しなかったという。またこの女性は介護に従事しているあいだ、隣近所に要介護者が放つ臭いが漏れ出ていないか、拭き掃除に余念がなかったともいう。ケアのあり方をめぐって家族ないし「家」の評価がなされるといふ認識があり、それゆえ夫婦だけで親のケアを専有しヘルパーの利用を留保したことがわかる。また、高齢者自身による福祉の利用控えもみられる。島では忌中に公的活動を控えることが規範化されているが、こうした規範がデイサービスの利用においても踏襲されるようになった。「本当は行きたいけれど、何を言われるかわからないから休む」と、心身ともに健康であるにもかかわらず、親族が逝去すると他の島民の目を憚り、忌明けまで隠遁生活を送る高齢者も少なくない。さらには、男性のデイサービス利用率の低さも指摘できる。「遊んでいると思われたいくない」という声に示されるように、〈農作業〓仕事/デイサービスの利用〓遊び〉という価値体系が基底にあり、前者に高い価値が置かれていることが、その背景として指摘できる。わずかな事例だけでも、従来からの規範ないし価値体系の残滓がみてとれ、それを踏襲しているか否かが常に周囲の目にさらされ、

福祉事業計画の基本理念に掲げ、島のお年寄りが最期まで島で暮らせるよう島民参加型の福祉活動を推進している。一例として、各離島内でホームヘルパーが養成され、高齢者の在宅介護サービス受給を可能にする手筈が整えられた。また、サトウキビ収穫時の協同労働に相互扶助的精神の残存を目されたある離島では、二〇〇〇年に県の介護事業のモデルに指定された後、高齢者のためのデイサービスと配食サービスが島民の手で開始された。

高齢者福祉の難しさ

しかし、島民間で展開される高齢者福祉の活動は、ドラマの世界のように「なんくるないさ〜(何とかなるさ)」とはいかない。例えば、家族の介護負担を軽減させる目的で養成されたホームヘルパーは、単身世帯や息子との同居世帯において積極的利用がみられるが、要介護者が嫁や妻と同居している場合には、その利用が控えられている。その理由を、姑と舅の在宅介護経験を有するある女性は「人逸脱は非難の対象となるさまがみてとれよう。島民は、そうした他者のまなざしを熟知しているため、あらかじめ行為を自制することが少なくない。高齢者地域福祉という新たな理念は、そうした既存の規範との摺り合わせのなかで展開しているのである。

それでも島には恵里がいる

沖縄の離島には、「ちゅらさん」で描かれたような親密な関係から導き出される人情味や相互扶助の心性が確かに息づいている。しかし、親密さは両刃の剣であり、前述したように、他者の評価を気にした自由のなさもある。こうした社会の行方を左右するのが、高齢者福祉の拡充に奔走している恵里世代の青年らだ。彼らは、激動する社会の狭間で島の行く末を案じているからこそ、福祉を通じた島社会の活性化に挑んでいる。そうした彼らの活動を正当化し、ときに口実として存在するのが、結の精神の現存を指摘し、福祉活動の旗振り役となった島外の人間である。「変化」は常に島外の人間との相互作用のなかで牽引される。だが、国や自治体の制度の運用など、〈外〉と〈島〉とを媒介する恵理のような人材が島には確実に育っている。島の未来は彼らに託されている。